

千葉県廃棄物処理施設設置等専門委員会 会 議 録

平成19年度 第4回

議題

- (1) (株)ナリコーの一般廃棄物焼却施設変更計画について
- (2) (株)エコネット成田の廃棄物焼却施設設置計画について
- (3) (有)源企画の産業廃棄物焼却施設設置計画について
- (4) 大平興産(株)の管理型最終処分場の保有水漏洩対策について

平成19年度 第4回 千葉県廃棄物処理施設設置等専門委員会 会議録

1 日 時

平成19年10月24日（水） 10：00～18：20

2 場 所

千葉県議会棟3階 第1委員会室

3 出席者

委員会：委員7名

事務局：大野環境対策監

廃棄物指導課：澤地副技監、矢沢副課長、大垣副主幹、吉原副主幹、阿由葉副主幹、菅谷主査、森崎主査、柚澤主任技師

環境政策課：松澤室長、三田副主査

環境研究センター：佐藤室長、大石研究員、堤研究員

4 議 事

- (1) ㈱ナリコーの一般廃棄物焼却施設変更計画について
- (2) ㈱エコネット成田の廃棄物焼却施設設置計画について
- (3) (有)源企画の産業廃棄物焼却施設設置計画について
- (4) 大平興産㈱の管理型最終処分場の保有水漏洩対策について

5 資 料

- (1) 事務局説明資料（事業者、計画概要、経緯、意見状況等）

資料1 ㈱ナリコーに係る一般廃棄物焼却施設変更計画について

資料2 ㈱エコネット成田に係る廃棄物処理施設設置計画

資料3 (有)源企画の産業廃棄物処理施設設置計画について

資料4 大平興産㈱の管理型最終処分場の保有水漏洩対策について

- (2) 事業者説明資料

ア ㈱ナリコー

一般廃棄物処理施設設置等専門委員会（平成19年8月8日）に係る回答

イ ㈱エコネット成田

事業計画の概要書

ウ (有)源企画

事業計画の概要書

エ 大平興産㈱

平成19年度第4回千葉県廃棄物処理施設等専門委員会説明資料（大塚山処分場保有水等浸出防止対策維持管理計画（案）、大塚山処分場保有水等浸出防止対策中間報告（1）、大塚山第一処分場保有水浸出調査計画書（案））

6 議事質疑等記録

（1）㈱ナリコーの一般廃棄物焼却施設変更計画について

【事業者説明後】

委員：ダイオキシン類の測定実績を見ると、16年度2号炉が0.72 ng-TEQ/N m³と管理目標値を超えており、17・18年度も目標値に近い。維持管理をしっかりとすべき。電気集じん機なので除去能力が劣る。維持管理についてどう対応していくのか。

事業者：先行き長期的にはバグフィルターを考えている。当面は清掃頻度の増加で対応する。

委員：現在の清掃頻度は年4回であるが、その前はどうか。

事業者：年1回である。なお、19年度に電気集じん機の補修を計画している。

委員：3.75 t/Hの能力であるが、ごみのカロリーが高く実績では2.7 t/Hである。稼働時間を延長して1日180 tの能力になるが、ごみ質がそのままであれば1日130 tしか焼却できない。

事業者：滑走路延長による発着回数の増を考慮してごみの量を予想すると、1日146.5 tとなる。

委員：ごみの量が増えると現状の炉では対応が厳しい。

事業者：順次、申請して対応したい。

委員：建物によるダウンウォッシュの予測で、マニュアルでは大気安定度D（中立）を使用することになっているが、B（不安定）を使用した理由は何か。

事業者：大気安定度A～Gまで計算した結果、Bが最大濃度となったので、その結果を記載した。

委員：高濃度条件から言えば、Aの場合が、もっと近くに高濃度が出現するはず。

事業者：A、A-B、Bで、出現地点は異なるが、ほぼ同程度の濃度となる。その中でBが一番高濃度であった。

委員：計算結果を見せて欲しい。

委員：想定している風速が8.43 m/sであり、現実的には高い風速である。出現頻度の高い風速、2～3 m/sで予測するべきではないか。

事業者：予測式を見ると、濃度は風速に反比例するので、風速が1/3になると濃度は3倍になる。その場合、HClの濃度があぶなくなる。管理値より実測値が十分低いので、ダウンウォッシュが発生するおそれのあるときは、管理面で対応することになる。

委員：工場用観測井の水質分析項目はこれがすべてか。

事業者：これだけである。

委員：一般ごみで、Cd、CN、有機りん等が入る可能性があるのか。分析してはいけないという訳ではないが、Cl⁻、大腸菌等別に測定項目があってもよいのではないか。

事業者：飲料水用の地下水では、飲用基準の項目を分析している。

委員：そのデータも添付願いたい。

委員：飽和透水係数を2回の試験結果の平均値としている理由は何か。

事業者：説明できる理由はないが、下流の土地改良区との協議の際にもこの数値を使用している。

委員：余裕があればよいが、通常は安全側を見て低い値を使用する。平均値を使用した経緯を調べて欲しい。

委員：ごみピットの漏れの監視で年3回の地下水観測を予定しているが、監視項目が足りない。観測井の位置は地下水の流れを検討した結果なのか。

事業者：井戸設置当時の状況を確認してみる。

委員：緊急時対応の中で、アンモニアは水処理施設へ移送とあるが、具体的にはどのような方法か。

事業者：アンモニアタンク周囲の側溝が排水処理施設へ接続している。

委員：移送というと人為的なイメージがある。

委員：重金属安定剤やポリ塩化アルミというような記載と、具体的な薬品名の記載が混在している。用語を統一したほうがよい。

委員：煙突の耐震構造の曲げモーメントの単位が間違っている。(t → t・m)

委員：地震時の亀裂も想定しているが、U字溝も亀裂が入る可能性がある。地下浸透のおそれがあり、通常は施設の下にパットを用意する。

事業者：アンモニアやポリ塩化アルミの容器は、よう壁内に設置し周囲に漏れないようにしている。

委員：地震時によう壁に亀裂が入らないように、弾力性のある樹脂でコーティングする方法もある。

事業者：対処してみる。

委員：光化学スモッグ注意報等の発令時に、焼却量を20%減、40%減とあるがどのように確認できるのか。

事業者：措置内容を大気保全課へ報告している。

委員：注意報発令とごみ焼却量は連動しているのか。

事業者：大気保全課からFAXが入り、削減措置を行う。措置確認のため立入検査がある。

委員：騒音の予測結果は、現況値なのか予測値なのか。

事業者：今回は稼働時間の延長だけなので、朝、昼、夕の現況値をもって夜間の予測値としている。

委員：地下水の観測は年3回であるが、透水係数を考えると流動しやすいので観測頻度を上げたほうがよい。また、動きの早いCl⁻などの項目の追加が必要。

【今後の対応】

本日の指摘事項について委員と個別協議とする。

（2）株エコネット成田の廃棄物焼却施設設置計画について

【事業者説明後】

委員：二次再燃室は温度を維持できるのか。

事業者：800℃をキープできる計画である。

委員：800℃の監視は二次再燃室の出口か。滞留時間2秒は二次再燃も含めてか。

事業者：そのとおり。

委員：850～1000℃の高温燃焼とNO_xの低減が相反する。県環境目標値が超えている状況でNO_x対策をどう考えているか。

事業者：キルンで還元的燃焼を行うことにより、実績でも150ppm以下である。

委員：150ppmでは脱硝して50ppm位にするのが普通。実際は？

事業者：100ppm程度。

委員：医療系廃棄物ということで水銀の目標値を設定しているが、20ng/Nm³の根拠は何か。

事業者：入り口の設定濃度と除去率から設定している。

委員：入り口0.1mg/Nm³で除去率80%だと、20ng/Nm³でなくμgの間違いではないか。根拠も示してほしい。

事業者：除去率は、焼却炉メーカー実績値。20μg/Nm³の間違いである。

委員：煙源条件、気象条件等から適切な予測と思うが、リッド（蓋）を考慮したりしなかつたりしている。逆転層の条件と発生頻度についてどう考えているか。

事業者：上層温度分布の調査をしたかったが、空港がありできなかった。文献から冬季晴天時に50～200mの高さで発生することもある。

委員：リッドは混合層が地表近くに発達するときに生じる。
どういう条件で発生するかわからずに予測したのか。

事業者：上層逆転層として予測している。

委員：リッドを想定して危険側で予測することはよいことだが、なぜそうしたのか理由を教えて欲しい。

建物と煙突の高さがほぼ同じなので、ダウンウォッシュの考慮が必要。

事業者：追加資料として添付してある。風速8m/sでダウンウォッシュが発生するが、頻度は0.01%である。

委員：建物によるダウンウォッシュは気象条件ではなく建物との関係で起きる。リッド以前の問題として、この事例では建物のダウンドラフトを考慮するべきだと考える。煙突高さ25mに対して建物の高さも同程度である。それを踏まえて予測すべき。建物と煙突の位置関係で、風向により影響の程度が異なることを考慮して予測し直す必要がある。

事業者：経産省の拡散モデル Metilis で、200m範囲内の建物の高さ、幅を入力している。

委員：建物影響についてももう少し検討されたい。

委員：地盤条件が良いとは思えない。北側のN値は10以下で最小は2である。施設的设计上、地震条件をどう考えているか。建物の基礎に関する情報が記載されていない。

事業者：ボーリングを行い、構造計算をする予定。

委員：ボーリングデータからの懸念事項、留意事項は何か。

事業者：地震も含めて検討に入れて精査していく。

委員：廃棄物ピットは深さ6mであるが、構造的な配慮について何か考えているか。

事業者：今後、精査する。

委員：臭気対策として、廃棄物ピットの空気は燃焼用空気を使用するが、破砕ヤードの臭気は問題ないか。

事業者：破砕ヤードやプラットホームの空気が廃棄物ピットに行き、燃焼用空気となる。

委員：搬入時は大丈夫か。エアカーテンで対応しているとすればわかる。

破碎したら一般的にボリュームが増え、もっとヤードの面積が必要ではないか。

事業者：破碎は焼却の前処理であり、破碎物の一部は廃棄物ピットへ入るものもある。

委員：単位体積当たりの重さの設定に問題は無いか。破碎物ヤードの面積が十分であることの説明が必要とおもわれる。

事業者：再検討する。

委員：廃酸・廃アルカリは、1号炉と2号炉へ配管されているが、振り分けのオペレーションはどうなっているか。

事業者：ポンプの切替である。

委員：切替の判断基準は何か。緊急時対応的なものか。

事業者：二つの炉に平均的に噴射するためのもの。フローシートを修正する。

委員：埼玉と千葉の中間処理工場から搬入されるが、割合はどの程度か。

事業者：両工場は同程度の規模なので、半々である。

委員：感染性の産廃と一廃の比率はどうか。

事業者：感染性については産廃と一廃を併せて、能力47t/日のうち10t/日である。

委員：感染性廃棄物は、敷地に入ってから焼却炉に行くまでの行程はどうなっているか。ごみの具体的な流れはどうか。

事業者：保管庫からベルトコンベアで運ばれ、そのままロータリーキルンへ投入される。

委員：汚泥も梱包されるのか。

事業者：プラスチック容器である。

委員：地下水の現状把握をしているが、敷地内の2箇所でこれ程水質が違う（特に溶存酸素が違う）原因は何か。

事業者：現状で汚染があるかどうかの確認であり、データの吟味はしていない。

委員：周辺の土地利用が変わっていくこともあり、供用後、汚染が発生したときに原因者なのか被害者なのかの問題になるので、もっと力を入れておくべき。

委員：地下水調査で、1回目と2回目の間が数か月なのに、水質が大きく変わっている。

事業者：成田市の調査でも地下水の動きが早いという結果が出ている。

委員：地下水の動きが早いということであれば、事故時の対応は迅速に行う必要がある。井戸の位置や本数がこれでよいのか検討が必要である。いずれにしても地

下水を監視していく必要がある。

委員：HClの除去は、180℃で乾式は厳しい。90%の除去率は難しい。混焼で予定どおりのバランスであればよいが、大量に廃プラが入ってくると大変。

事業者：HCl計、SO_x計を設置し、それを見ながら消石灰の吹き込みを行う。入口濃度が高くなれば負荷を低減する。

委員：目標値を守るようにコントロールすること。

委員：地中で動きの早いCl⁻をモニタリングする必要がある。漏水チェックに使う。また、医療系廃棄物を扱うので、病原性を意識し大腸菌や一般細菌も必要ではないか。

地下水にダイオキシン類が検出されているが、原因は何か。この土地の履歴はどうか。

事業者：造成後、企業の稼働はない。倉庫をつくろうとした基礎は残っている。

委員：台地状であるが盛土はあるか。

事業者：調整池側に一部盛土がある。

委員：外部の土からの溶出は考えられるか。

事業者：表面の土壌が入り込んだ可能性はある。なお、周辺ではこの深さ(-10m)の地下水は使用されていない。

委員：下流で浸み出して、河川に入ることを頭の隅に入れて事業を行っていただきたい。河川水は、水田に使用するか。

事業者：用水が入っています。河川は排水路となっています。

委員：エコネット成田は焼却炉の経験はあるか。

事業者：親会社である共同土木は埼玉で経験がある。

委員：焼却炉は運転管理が駄目だとうまくいかない。社員教育はどうするか。

事業者：運転要員としてエンジニアリング会社を常駐させる。

委員：焼却炉への廃棄物の投入が難しい。

委員：騒音予測結果で、敷地西側だけ昼間と夜間に差があるが、北・南・東は昼間しか稼働しない破碎機の影響はないと考えてよいか。主要機器の騒音レベルを見ると破碎機は90dB、86dBと大きく、配置図をみても破碎機1は南側に近い。

事業者：管理棟などの遮蔽効果のせいかもしれない。再度、検証する。

委員：遮蔽効果について周波数ごとに検討されているが、主要な施設でよいから計算の過程を確認させていただきたい。

管理棟事務室の近くに発電タービン、破砕機がある。執務環境は大丈夫か。

【今後の対応】

本日の指摘事項を踏まえた資料をとりまとめ、再審議とする。

（３）（有）源企画の産業廃棄物焼却施設設置計画について

【経緯説明後】

委員：計画では能力27.6t/日であるが、将来、増設計画はあるか。

事務局：自社の中間処理の残さ、木くず及び医療系廃棄物の処理で能力を設定しているが、将来の増設計画は聞いていない。

【事業者説明後】

委員：この計画地がこの事業を行うに当たり最適である理由は何か。

事業者：千葉市に本社があり、八街市に中間処理場がある。東金市のこの計画地に施設を設置すると、八街市が本社との中間地点になる。従業員も通勤しやすい。

委員：救急病院のリストがあるが、これらの病院は、現在、医療廃棄物をどう処理しているのか、どう食い込んでいくのか。

事業者：他県の業者も含めて処理委託をしている。診療所レベルまでの調査はしていないが、診療所も対象に考えている。

委員：医療廃棄物の受入の見通しはどうか。

事業者：収集運搬業者から情報を収集している。収集運搬業者には、数量的に不確定ではあるが、将来は当社でも処理可能になると伝えている。

委員：地域の特徴があり、そこにふさわしいものがある。この地域は平坦で交通の便もよいところである。ここでなければいけないというものが伝わってこない。

委員：海拔が低く排水が悪い。最近の気象がおかしいこともあり、医療廃棄物を扱うので異常気象に対する対策はどうか。

事業者：冠水しやすいが、敷地内に浸水しないよう、宅盤から+20cm、外部からは+30cmのコンクリートブロックを計画している。また台風情報で排水ポンプ等を用意する。

委員：宅盤を上げるのか。

事業者：建屋の床面を高くするが、宅地はブロックで囲う。

委員：みんなで宅盤を上げたら浸水被害が大きくなったという例もある。

ボイラー周辺のピットについて、亀裂が入ったときの雨水対策はどうか。

事業者：焼却炉の灰を出すためのコンベアを入れる側溝のようなものであり、ステンレス鉄板で覆う。また、ピットにはカバーがついている。

委員：雨水流入防止対策はどうか。

事業者：かさ上げ対策をとっているので、後日、拡大図を提出する。

委員：トラックから中身をピットにおろすと作業場が汚れ、トラックの車輪が汚れる。洗う場所はあるか、水はどうなるのか。

事業者：洗車スペースを設け、排水はオイルトラップを経由して地下貯水槽に入り、炉内噴霧する。

委員：地下貯留槽から漏水しない手立てはどうか。

事業者：雨水が流入しないように蓋が付く。また、コンクリートを厚くし防水対策を施す。

委員：敷地外周に側溝はあるか。汚れのない雨水はそのままで良いが、汚れに接した雨水は回収できるような側溝を設け、貯水槽で受けるか処理するかが必要である。検討願いたい。

委員：感染性の保管庫とは保冷車のことか。

事業者：現在も保冷車を所有しているので、例示した。

委員：保管容積が保冷車の容量と異なっている。

事業者：整理して回答する。

委員：分別して土間に保管、積み上げることになるが、勾配45°の根拠は？

事業者：1/2勾配、1:2の勾配である。

委員：容量不足にならないか。

事業者：修正する。

委員：鉄筋コンクリートの柱に床はRCのコンクリートであるが、床に目地が必要ではないか。液体物は入らないということでよいか。

事業者：搬入しない。

委員：敷地が川に近い。洪水への対応も重要と考えられる。周辺の土地利用は水田が多い。冷却塔は100tあり、地盤に対する配慮が必要。傾きやすべりが心配である。

事業者：ボーリング調査は実施している。それにより設計している。

委員：地耐力130kN/m²は、それほど強い地盤ではない。

事業者：対応する。

委員：杭を打ったとき、杭に接するコンクリート板との間に間隙ができる。杭を打た

なければ不等沈下のおそれがある。

委員：この地域は砂丘の場所。液状化が起こるのではないか。

委員：成田市に医療廃棄物の焼却施設がある。成田市と東金市はそれほど離れていない。東金市でなければならぬという理由はない。他に利用価値がある場所に割り込んでいく必要性が欲しい。

委員：ダイオキシン類測定結果報告書は、ばいじんと飛灰の値が逆ではないか。通常は飛灰の方が高い。

20時間運転は変則である。くすぶっている間はダイオキシン類の生成が多い。なぜ20時間なのか、くすぶっている間の排気はどうか。

煙源条件の排出量、濃度が具体的すぎる。この根拠は何か。普通は安全を見て高い数値で予測する。この数値を保証するのか。

事業者：16時間投入で残りの4時間は灰出し作業である。炉は燃え続けている。ばい煙濃度は過去の類似施設の結果から保証の範囲である。

委員：ダイオキシン類の0.92 ng-TEQ/N m³はどこからきたのか。

事業者：実測値1 ngで、酸素換算をすると0.92 ng-TEQ/N m³となる。

委員：最適の条件で予測してよいのか。安全を見て、最悪でもこれ以下という数値で予測するのではないか。0.92 ng-TEQ/N m³を超えると操業差し止めになるが、それでよいのか。

事業者：整理して再提出する。

委員：建屋内の機器の予測で、屋根の換気装置や窓からの音の漏れを見込んでいるか。

事業者：確認して回答する。

委員：予測は最悪を想定して行う。このまま使うなら根拠を示すこと。通常は数値をまるめる。

破碎機は、廃プラが29.7 t、がれきが190 tであるが、なぜ、量がこんなに違うのか。

事業者：ロータリー式破碎機で、炉投入の前処理として、粗破碎を行うものである。

委員：廃プラとがれきは大分性状が違うが、同じ破碎機で大丈夫か。

事業者：混合廃棄物を考えて品目に加えている。

委員：機能的に大丈夫か。

事業者：そう聞いている。

委員：排ガス冷却において、腐食や目詰まりはないか。

事業者：肉厚鋼管を使用する。5年以上の実績がある。目詰まりについては月1回清掃する。

委員：ばいじんの付着でダイオキシン類の再合成のおそれがある。定期的清掃が必要である。

類似施設の大気汚染、悪臭のデータを提出願いたい。周辺の悪臭調査データもあれば願います。

なぜ、20時間稼働なのか。

事業者：16時間投入＋4時間後燃焼＋4時間灰出しである。

委員：井戸水の使用量はどの程度か。

事業者：水冷方式であり、時間8 m³の蒸発量である。

委員：焼却炉231 m³/H、ガス冷却173 m³/Hに対して8 m³/Hの補給になる。

井戸の深さは？

事業者：60 mである。周辺の利用に支障を生じない深度である。

委員：雨水利用ができないか。60 mの井戸だと水田の水が減るかもしれない。

委員：地質調査の深さはどの程度か。

事業者：N値が安定するまでの18.42 mである。

委員：地質はどうか。

事業者：細砂である。

委員：水田への影響のおそれがある。深いところまでの調査が必要である。

委員：ダウンウォッシュの予測に使用した風速の根拠は何か。

事業者：吐出速度の1/1.5を設定している。

委員：マニュアルでは1/2となっている。根拠は何か。

事業者：後で回答する。

事業者：他施設では屋根の水を雨水専用タンクに貯めて利用している。検討したい。

委員：オーバーフローしないように、雨量と使用量の細かいバランスを考慮して貯水槽を設置されたい。

【今後の対応】

本日の指摘事項を踏まえた資料をとりまとめ、再審議とする。

(4) 大平興産(株)の管理型最終処分場の保有水漏洩対策について

【事業者説明後】

委員：揚水により高濃度範囲は縮小しているが、経時変化を見るとあまり変わっていない。浸み込んだことが原因なのか。

事業者：泥岩にCl⁻が吸着し、それが出ているのではないかと。

委員：一気に水位を下げた洗い出す方法、または、周囲の井戸へ清水をリチャージして洗い出す方法がある。N o 8 観測井の水位が低下しており、下流側への地下水の供給が断たれている。N o 2 とN o 8 の観測井の間に井戸をつくり清水をリチャージすれば、洗い出しの促進と下流側への水の供給ができる。

委員：揚水方法をエアリフトを主にした理由は何か。ポンプの方が効果的である。水処理施設は、窒素が設計値に近い。除去は難しいが見通しはどうか。

事業者：スケールによりポンプが動かなくなることがあった。効果は落ちるが確実なエアリフトにした。

処理後の窒素の濃度は、実績では10mg/l前後まで落ちる。

委員：いい方向の印象を受けている。

排水計画について、放流基準でよいか、一抹の不安がある。放流基準は希釈されることを考慮して環境基準の10倍程度が普通であるが、ここは水源地域に放流している。渇水期も考慮し、放流量と河川の流量を勘案して、環境基準を鑑みた、独自の目標値を設けていただきたい。

事業者：I S O 14001 において0.8掛けの自主基準を設定している。塩濃度についても雨水を貯めて希釈しているが、常時安定して流せるよう今後も工夫したい。前回指摘のあった間欠放流についても、既存の天日乾燥施設を利用し、そこに一度貯留しバルブで定量放流するよう検討している。(10月23日から対応済み)

委員：キャッピングや鉛直遮水はできないのか。

事業者：揚水で効果がないときには鉛直遮水を考えるとしていたが、壁を作っても回り込んで下流へ行ってしまう。完全に囲うしかない。

委員：揚水している間はよいが、もういいだろうと止めたら根っこが残っているので元に戻ってしまう。

事業者：最後まで対策を続ける。

第一処分場の水質変化に基づき、30年間を目途としている。

委員：新しい技術が出たら取り入れる余地を残しておいて欲しい。

委員：K d 3 8 層へパッカー技術で水を供給して汚れをはぎとる方法もある。

いささか電導度は下がりつつあるが、まだCl⁻はレベルが違う。

楽観することは出来ない。

事業者：K d 3 8 層に注水する計画があったが、県の指導で水を入れてはいけないとなった。

委員：揚水では下流に水位の低下を招くことは間違いない。

事業者：N o 8 の水位は管頭から－30 c m が－70 c m になり、下流側に30 m 離れると水位の低下は40 c m である。

委員：廃棄物が相当あるので注水してもとれない。処分場内に水を入れずに出て来た水を汲み上げて処理するのが現実的である。

委員：キャッピングの考えはないか。

事業者：残余容量5万m³分がある。そこを早く埋めて整地すれば雨水対策がとれる。

委員：廃棄物と原地盤との間は透水係数が高い。ゲル状物質によるキャッピングが可能ではないか。

事業者：断念しているわけではない。N P O でも検討しているので可能であれば積極的にやりたい。

委員：まだまだいろいろ手がありそうだが、コスト、時間の問題がある。本日の意見を踏まえて検討願いたい。

【事業者退席後】

委員：とりあえずは現実的な対策だと思う。Cl⁻は高いが他の物質は高くない。完全な対策を目指すとな資金的にメンテナンスができなくなる。一応の区切りをつけて埋立開始できるようにすべきである。

委員：同様の意見。揚水は続けていくことが大事。抜本的ではないが企業の体力が必要。新技術が出たときに対応させる。

委員：県のデータと報告の間にギャップがある。説明が必要。再開に当たって客観的に把握するための努力が必要。このへんが再開に当たってのハードルになる。揚水すれば良いということになっているが、積極的な追求が必要。

委員：問題のある第二処分場の再開ではない。第二処分場は埋めるべきではない。新しい処分場を埋めるという意味である。

委員：県と事業者では採水場所が違うのか。

事務局：基本的には同じ。採水時期の違いと判断の違いである。

委員：事業者側の都合の良い言い方であるが、遠い方は早く効果が出る。中心部は効果が出ていない。効果があると言ってもあながち間違いではない。

事務局：先日、濃度、水位の確認を実施したが、データに差はなかった。中心部の評価の言い方が異なる。

委員：揚水浄化の例は結構あるが、そのデータを見ると実験室のようなデータではない。やらないよりやったほうがましという程度。

委員：効果が出ているわけではない。希釈効果である。汲み上げを止めたら元に戻る。

委員：根本が直っていない。技術が進めばごみを取らずに対策ができるかもしれない。それに希望を持って進める手もある。

委員：グラウト法の高圧噴射を利用して、Kd 38層を狙って固化剤を噴射しコンクリート化する方法もある。高額な費用ではない。ただし廃棄物の酸によって固化が阻害されるおそれがある。

事務局：第三処分場は審査済みである。汚染の拡大傾向はおさまった。今後も確認を続け適切な指導を行うこととし、第三処分場については住民説明会の上、事務を進めたい。

委員：揚水対策で住民説明会を乗り切れるか。

事務局：前提条件として、今以上の負荷を掛けないため、今後も第二処分場は搬入停止を継続し、廃止基準に達するまで、継続的に維持管理をさせる。また同様の構造である第一処分場についても調査させ、必要があれば対策をさせる、こういう条件で第三処分場の変更許可の手続きを進めたい。

委員：グラウト法による固化剤の高圧噴射を加えた手法を恒久的対策に採用することが出来るかのテスト、検討をしては如何か。

委員：力学的には出来る。廃棄物のpHを含め化学的な性状を見極めれば、何処まで固まるか予測がつく。

委員：住民説明会もある。具体的で、比較的期待できるのではないかと思う。

事務局：時間的なものもあり、早急に進めなければならない。最後までずっと揚水対策で行くのではなく、更に検討をさせていく。完全に止めるのが一番良いが、資金計画等も考えると直ぐには出来ない。

委員：事業者の計画では対症療法と言われてしまう。

事務局：現在、取れる対策はこれしかないと説明する。今後は、更に漏洩対策を継続

させていく。先ほども説明したように、その間は第二処分場に負荷を掛けさせない。第三処分場は、遮水シートを敷き負荷を掛けない形で、変更許可手続きを進める。

――委員からは更なる発言はなかった。――